
左

栖坂月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左

【Nコード】

N3163H

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

花は枯れるからこそ華やかであり、命は失われるからこそ尊いものである。美もまた然り。

（前書き）

時代背景はある程度考慮していますが、史実に基づくほど深くはありません。さほど気にしないでいただけると幸いです。

晩夏、陽の傾きつつある頃合にも関わらず、広間は熱気に包まれている。

じつとりと纏わり付く気配が、この上なく不快であることは言うまでもないが、それでもこの場を離れようなどと思っている輩は、少なくともこの中には皆無であろう。

むろん、殿の御前であることも理由の一つではある。

しかし私を含め、ここにいる多くの者達は殿の存在がなかったとしても、ここに留まることを選択しただろう。

「では、双方首尾は整っておるな？」

一歩前に進み出た進行役の『ヒゲ』が、当事者の二人へ交互に視線を送って頷きを確認する。

「題目は生き物、刻限は夕刻の鐘が鳴り終わるまでとする。日頃の鍛錬を存分に発揮されよ。それでは、始めっ！」

合図と共に二人は座ったまま殿に向かって頭を下げ、異例と表現せざるを得ない御前試合は開始された。

二人の前にはそれぞれに一抱えほどもある丸太が一つずつ置かれている。試合と言ったものの、もちろん流血を見るような武芸の試合ではない。あの丸太より掘り出した彫刻によって優劣を決めようという、いささか変わった趣向の試合である。

この提案を持ち出したのは、右側に座る男——通称『マツ』と呼ばれる先代から我が家と交流のある彫刻師である。仏像が専門で、蔵には彼の作品が幾つも並べられている。その仕事ぶりは彫っている姿すら優美と詠うたわれると評判で、身なりが小奇麗なこともあり、すでに皺の深くなるほどの壮年でありながら、侍女達の人気も高い。その彼が意匠の施された道具箱らしき物から取り出したのは、十種類以上はあるつかという大小様々のノミと使い込まれた木槌だった。刀を見れば力量がわかるとは良く聞ぐが、あのノミを見ただけ

でも、マツという彫刻師の力量が窺い知れようというものだ。

正直私としても、マツの手並みを直接目の当たりにできることに、少なからず興奮している。いや、ここにいるほとんどの者は、マツの仕事ぶりを見るために集まったと言えるのではないだろうか。

そのマツは、数あるノミの中から一際大きな一本を持ち上げると、手馴れた様子で木槌をクルリと回してから振り上げた。そこで一瞬だけ止まり、横目にて対戦相手の様子を確認してから最初の一振りを開始する。

意識しているのは、明らかにマツの方だ。

対するもう一方、確か『ジン』と名乗ったボロ布を纏った男は、彫刻師というよりは山賊か乞食であると言われた方が納得できるような、あまりにみすばらしい格好をしていた。豪快な無精髭とどこに向かつて生えているのかわからなくなるほど荒れた髪の毛が、あまりに強烈だ。正直、場違いにも程がある。

いや、見た目ばかりではない。その噂はマツのそれと比べても異質極まりないものだ。

曰く、枝を彫れば花が芽吹き、鳥を彫れば春を謳うと言う。それほど一品ならば拝ませて欲しいと思うところだが、不思議なことに彼の作品は何一つ残ってはいないそうだ。その全てが歩き、飛び、枯れてしまったそうである。

胡散臭いにも程があるうというものだ。

とはいえ、民衆における彼の存在感は驚くべきものらしい。殿の代になり、彫刻への関心が薄れてしまったこともあり、マツとしては気が気ではなかったのかもしれない。

いや、あるいは噂を口実に、自らの存在を主張するための踏み台とでもするつもりなのかもしれない。噂に踊る素人相手にというのが、いささか大人気ないという気もするが。

それにしても、ジンという男には彫刻をする気があるのだろうか。懷から使い古されたナタとカンナを出したまでは良いとして、一向に丸太へ向き直ろうとしない。先程から木片を組み合わせて土台の

ような物をこしらえているだけだ。

それに、この一連の動きの中で、彼は右手しか使っていなかった。左腕は懷に仕舞ったまま、出そうとさえしていない。彼が隻腕だなどという話は聞いたことがなかったのだが、あるいはそうなのだろうか。

「ジンとやら」

ノミと木がかち合う硬い音のみに支配されていた広間に、男性としては甲高い、殿の良く通る声が響く。

「何でございましょう？」

組みあがった土台の上にカンナを裏返して載せたところで、落ちて着き払った髭面が応じて振り返る。風格があるとまでは言わないが、少なくともこの場にいることを場違いとは思っていないような素振りだ。

「お前、左腕は使えないのか？」

「はい、先日転んだ拍子に骨を痛めたようでして、本日は片手にて失礼させていただきます」

「そんな腕で満足な勝負ができるとでも？」

「善処いたします」

「そうか。まあ、今更日取りを改めてというのも面倒だからな。別に構わぬ」

勝負への真剣みに欠けるのではないかとすら思える発言に、殿は怒るでもなく肩肘を付いたまま頷いた。

元々、殿は今回の試合には消極的だった。

面白いことと珍しいことには首を突っ込みたがる殿としては、絶対に食い付いてくると思っていただけに、少し意外という気さえする。

そのことを直接聞いた猛者の話によれば、彫刻を目の前で直接見られることは楽しくもあるが、優劣をつける類たぐいのものではないという考えらしい。まあ、殿の好む物は我々にとって不可解な物であることが多い故、それを自覚している殿も優劣をことさら主張しない

よう配慮しているのかもしれない。

「……デコ」

退屈そうに欠伸を噛み殺した殿が、こちらへ目を向けることなく私を呼ぶ。

「はっ」

「茶を持って来い。あの二人にもな」

緩慢な空気と虚脱感に溢れた雰囲気、そしてそれらを増長するような茶の振る舞い。緊張感のない勝負になるのではないか、そんな危惧が鎌首をもたげるような、悪い予感が生まれ始めていた。

事態は、予想以上に悪化していた。

マツは良い。作業は着々と進み、すでに鳥の頭であるとわかる程度には造形が整いつつある。彼がノミを立てる度、木槌を振るう度、溜め息と歓声が上がっている。その出来は、遠目に見てもわかるほどの躍動感に溢れていた。殿への献上品として考えても、申し分のない一品となるだろう。

問題はもう一方、ジンの方だ。

こちらは開始直後にナタとカンナを準備して以来、全く作業めいたことをしていなかった。時折茶をすり、それ以外は目を閉じて黙想でもしているのか、微動だにしない。正直本当に眠っているのではないかと疑ってしまうほど、静かな時間が過ぎていつてしまったのである。

諦めたなどという問題ではない。最初から勝負をするつもりすらなかったのではないか、場に集う観衆からは、そんな囁きも漏れ始めていた。

しかし、さすがに問いただすべきかと私が一步を踏み出した矢先、それを見計らっていたかのようにジンが動き始める。

彼は体勢を変え、片膝を付くような姿勢を取ると、傍らかたわのナタを持ち上げて大きく振りかぶった。深く息を吸い、吐き出される気合

と共に丸太のほぼ中央へ向けて振り下ろす。

それは彫刻と言うより、薪割りであるように見えた。いや、実際の作業として考えれば薪割りと何一つ違いはなかったであろう。しかし、これは火にくべるための薪を用意することが目的ではない。あんなに細かく断ち割って、一体何を作るつもりなのだろうか。いや、それ以前に今から間に合うものなのだろうか。

格子戸から見える陽の陰り具合を見る限り、刻限まで半刻はんときもないだろう。ここに来て急いだところで、到底満足の出来る作品になどなろう筈もない。それとも、さすがに何も出来ませんでしたで言い訳にならないとも思い立ったのだろうか。

いずれにしても、評価を下すのは殿だ。むろん完成された作品の出来が勝敗を左右することになるが、御前試合である以上は過程の印象も重要視されてしかるべきだろう。

少なくとも現時点において、マツの圧勝は揺るぎないものだ。

しかし、そんな周囲の冷ややかな思惑を感じているのかいないのか、ジンは開始当初から微塵も変わることはない仏頂面でナタを振っている。その様は、彫刻をしているというよりも、子供が初めて触れた刃物を振り回して遊んでいるかのような、どこか危うく行き場のわからない行為に見えた。

それは豪快というよりも乱雑、あるいは粗暴と表現すべきであるように映る。細かな木片が飛び散り、大きな破片が幾つも剥がれ、転がり落ちた。

と、不意にジンの動きが止まる。ナタを置き、代わりに細長い切れ端の一つを持ち上げると、今度はカンナを載せた土台ごと引き寄せて削り始めた。大雑把な作業から、今度は一転して退屈な単純作業である。時折持ち上げては形を確認するように引つ繰り返して眺めてはいるものの、どんな形を目指して削っているか全くわからない。角が丸くなり、削る音が少しばかり柔らかくなりはしたが、相変わらず細長い木片にしか見えなかった。

しかし、刻限は無情にも迫っている。

全体の確認と細かな修正に入っているマツはすでに勝利を確信しているのか、始まった当初のような強い意識は感じられない。もちろん、それを慢心だと罵る輩などここには居ないだろう。むしろ彼の勝利を疑う方がどうかしている。

結局、ジンの作品は明確な形を主張することなく、刻限を意味する六つの鐘が鳴り響いたのである。

「それまでっ！」

いささか拍子抜けした雰囲気^{たしな}を嗜めるように、ヒゲが張りのある声で宣言する。

その声に応じ、当事者二人はそれぞれの作品から手を引いた。片や見事な鷹の頭、片や木刀と呼ぶにも木玉と呼ぶにも中途半端な木片、判定などする必要すら感じない出来の違がある。片手を負傷してのこととは言え、さすがに御前試合でこの有様は無礼との^{そし}謗りを受けても否定は出来ないだろう。

「では、作品を此れへ。まずはマツの物より」

少しばかり馬鹿馬鹿しいと感じながらも、私は自らの役割を果たすことにした。ここで進行を滞らせてうやむやになるようなことでもあれば、城内の風紀や尊厳がますます失われかねない。

私は全員の視線を集めて進み出ると、座ったまま自らの作品を差し出すマツから両手で受け取った。

大きさは人の頭より少し小さい程度だ。しかし、不思議と重く感じられる。これがあるいは、魂の重みというものののだろうか。

踵を返し、殿の目前まで歩み寄ると、細心の注意を払って床へと下ろす。

「ほう、これは見事だな。名匠未だ衰えず、といったところか」

鷹の頭を間近で見た殿の感想は、皆の思う通りであったと思う。

これを機にかつての威光を取り戻そうというマツとしては、上々の結果であると言って良いだろう。実際、私も間近で見て驚いた。

造形の素晴らしさは以前より知っているつもりであったが、細部に至るまでの気の入れようと独特の凛々しさは、鷹の生命力すら表現して見せているようである。

特に羽毛の質感など、とても木で出来ているとは思えない。

「さて、続いてジンの作であるが……それは一体何なのだ？」

カンナ横に並んでいる細長い木片を指差して聞いてみる。

「私の作品は、これではありません」

「どういうことだ？」

というこちらの質問に応じる代わりに、ジンは懷から素焼きの小皿を取り出した。何をするつもりなのかと訝^{いぶか}しむ我々を尻目に、彼はカンナを土台より取り外すと、床に置いた小皿の上に削り糟を一つまみ盛った。

「これを」

「……な、何だ、これは？」

これが何を意味しているのか、何となく理解している筈ではありながら、断じて認めたくはなかった。

「鯉節です」

だが、その回答をにべもなく告げてくれる。さすがにこれには、私も怒りを覚えた。

「貴様っ、御前試合を何と心得るか！」

これが単なる見世物小屋での座興であるなら構わないだろう。しかしここは仮にも一国の主が住まう場所であり、我々にとつての抛り所なのだ。そこでの無礼な振る舞いは、断じて許されるものであつてはならない。

「まあ良いではないか」

ところが、その抛り所の中心が私を^{なだ}宥める。

「ですが、殿っ」

「そう熱くなるな。出来不出来は題材によつて決する訳でもないだろう」

「しかし、題目は生き物であつた筈です。鯉はかつて海を泳いでは

いたでしょう。しかし鯉節は生き物ではありません」

「鷹とて、この姿で飛んでいる訳ではあるまい。首を刎ねられれば、それはただの死体だ。それとも、お前は死人を人間ではないとして物の様に扱うのか？」

「それは……」

屁理屈である。しかし、ここでごねるのは勝負に水を差すことにもなるだろう。それは私とて望むことではなかった。

「マツはどうだ？ 相手の作は生き物ではないと思うか？」

「いいえ、殿の判断にお任せいたします」

殿の問いに、迷うことなくマツは答える。

相手がアレでは、ケチをつける理由もないというところか。不満はあるが、当事者が良いと認めたものに私が口を出す道理もないだろう。私は茶色い削り糟の載った小皿を持ち上げ、崩れないように注意しながら殿の下へと運んだ。

こんなことを言うのは何だが、間近で見ると確かにそっくりだ。うつかり炊事場にでも置いてあったりしたら、誰かが煮立った鍋に放り込んでしまっても不思議ではない。しかし、だからといって彫刻として上手く出来ているとは思えなかったし、思いたくもなかった。

「どれ」

と言って小皿を取り上げ、文字通り目前へと持っていったところで、殿の表情が変わる。そのまましばし眺め続け、その姿勢のままジンへと視線を送ってから、静かに小皿を置いた。

額の前で手を組み、それでコツコツと一定の調子で額を突付きながら、殿は目を閉じて何やら考えている。軍議において行き詰った時、決まって見せる殿の癖だ。とりあえず、何かを真剣に考えていることは間違いない。問題なのは、何について考えているのか全くわからないということだ。

「よし」

ポンと膝を叩き、殿は姿勢を正した。

「マツよ。お前の彫刻は見事であった。名人の技を間近で見られたことは良い経験であった。感謝する。その実力が未だ衰えていないことは俺が保証する。これからも安心して作品に鋭意励むと良い。しかし……」

賛辞に応じてマツが頭を下げようとしたところで、殿の表情が切り替わる。

「ジンの作との甲乙は付け難く、今回の勝負は引き分けとする」
広間がどよめきに包まれた。

非難や不平が溢れた訳ではない。単純な驚きが場を満たしていた。おそらくは当事者もそうだったのだらう。しばらくの間、マツはただ呆然と佇んで殿の顔を見詰め、ようやく言われていることの意味を理解すると、真っ赤な仏頂面のままおぎなりに頭を下げ、早足に退場してしまった。

場を取り仕切る者としては呼び止めて正すべき局面なのかもしれない。しかし、傍観者の私ですら不満を感じるような判定である。これはむしろ、いきり立って咬み付いてこなかったただけマシであるうとすら思う。

「さて、ジンとやら」

殿の穏やかな声に、場が静まる。

ここが御前であることを思い出したから、ということもあるだらう。しかし私を含め、大半の者は気になって仕方がない筈だ。殿が、どうしてこのような結論を導いたのかが。

殿の言葉からそれを読み取るうと、我々は固唾を呑んで見守る。

「一つ聞きたい」

「何でございましょう？」

「どうしてこのような真似をした？」

「このような真似、と申しますと？」

「とぼけるな。お前の腕があれば、羽虫の一匹を彫ったとしても皆が驚愕したであらう。それをせず、自ら敗北をするような勝負を行ったのはどうしてなのかと問うているのだ。しかも、わざわざ左手

が使えぬなどとこ丁寧に嘘まで並べるとは、ずいぶんな念の入れようではないか？」

殿の言葉に、ここへ来て初めてジンの表情が変わる。

「気付いておられましたか」

心なしに嬉しそうに、悪戯のばれた子供のような笑みを浮かべて左腕を懷から出した。

「戦人を舐めるでないわ。相手の弱みを正確に見極められない程度であつたなら、当の昔にどこぞで屍となっていただろうよ」

「御見それしました」

「で、そうまでして勝ちたくなかつた理由は何だ？ ひよつとして正直に彫つておつたら恐れおののいた『大うつけ』に首を刎ねられるとも思つたか？」

殿がニヤリと笑う。ジンは驚き、一息を吐いてから正座をして姿勢を正すと、改めて深く土下座した。

「失礼つかまつりました。どうやら、侮つておつたのはこちらのようです」

「良い。侮られることは、戦人としては武器だと思つておる。それはそうと、理由を聞かせてはくれんのか？」

「正直に申せば、私はそもそも勝負などお受けするつもりはありませんでした。しかし、応じなければ引つ立てても連れて行くと言われ、逃げれば世話になつてゐる宿主に迷惑が掛かります故、やむなく応じた次第です」

「なるほどな」

殿は大きく頷く。しかし、それほどまでにマツはジンを恐れていたということか。

「とりあえず、引き分けという結果は広く知らしめておこう。俺の知らぬこととは言え、迷惑をかけた。で、せつかくだ。何か褒美を取らせようと思つが、何か望みがあるか？ 何なら、この城で彫刻に没頭しても良いぞ」

「お心遣い、感謝いたします。しかし、今の宿が気に入っておりま

すので」

「そうか。ならば金が良かろう。宿にとって助けにもなる」

「それも有り難いのですが……」

「何かあるのか？」

勝負にこだわらない男の望みに興味が湧いたのか、殿が身を乗り出して言葉を促す。

「一つだけ」

「何だ。申してみろ」

「では……」

改めて姿勢を正し、鋭い眼光を真っ直ぐに殿へと向けて、ジンは詠い上げる様に言葉を奔^{はし}らせた。

「この国を、いえ、この地を平定なさつて下さい」

「……お前、俺に天下を取れと言うのか？」

「手段は問いませぬ。ただ、私はこの国が気に入りましたので、なるべく長く留まりたいのです」

「なるほどな。ふむ……良いだろう。その願い引き受けた」

殿の宣言に、一同が再びどよめく。

「とはいえ、それは俺の望みでもある。お前への褒美としてはやや不足だろう。今宵は宴を開く。お前も愉^{たの}しんでいけ」

「そういうことなら、喜んでお受けいたします」

こうして、奇妙な御前試合は歓声の中でお開きとなった。

宴は、夜が明ける頃まで続いたことを追記しておく。

翌日、二人の作品を蔵に収めるため、盆に載せて運ぶこととなった。本来なら侍女の仕事だが、昨日の宴の後片付けに追われてそれどころではないらしい。放って置いてすっかりなくなりでもしたら大変なので、仕方なく私が片付けることにしたのだ。

とはいえ、改めて見ても釈然としない。

「やはり、ただの木片にしか見えんな」

鰹節は小皿と一緒に木片も収めることにした。そうでもしないと、間違いなくゴミだと思われて捨てられることになるだろう。いや、飯にそうなったところで誰も気にしたりはしないだろうが。

「おっと」

つい考え込んでしまったせいで前方不注意となり、足を踏み外しかけていることに気付いて慌てて立ち止まる。しかし、惨事こそ免れたものの、角が丸くなっていた鰹節本体が盆から転げ落ちた。

それは何度か跳ねてから転がり、石畳の上に鎮座する。

私は安堵した。正直、落ちたのがマツの作品でなくて良かった。

この繊細な作品が落ちていたら、端が欠けるくらいの被害は出ていたことだろう。彫刻に大して興味のない殿はともかく、あれだけの時間と手間を懸けたマツに申し訳が立たない。

一つ大きく息を吐いてから盆を置き、私は庭へと歩み出た。

と、そこへどこから入ってきたのか、一匹の猫が走り出て、鰹節本体を啜えていこうとする。面食らう私は一瞬動転して言葉を失ったものの、このまま見過ごすわけにもいかないことに気付き、慌てて駆け寄った。

「こらっ、あっち行け！」

猫には少しばかり大き過ぎたのだろう。追い散らされて諦めたのか、猫は茂みへと逃げて行った。

しかし、これはどういうことだろう。

綺麗な歯型の残った鰹節を拾い上げて、首を傾げる。

「もしかして、魚のような匂いでも付いてるのか？」

鼻を近付けた私は、息が止まる。

これはどういうことなのか、理解することができなかった。そして、それを明確にするため、小走りに盆を置いた場所へと戻ってきた私は、周囲に人の姿がないことを確認して、小皿に盛られている削り糟をつまみ上げた。

匂いは間違いない。本体と同じだ。

そしてそのまま、こんなことをしている自分に驚愕しながらも、

その削り糟を舌の上に置いてみる。

「馬鹿なっ！」

それは、紛れもなく鯉節だった。

昨晚、誰かがこっそり入れ替えたとも言うのだろうか。いや、それにしてもおかしい。同じ形をした物を用意するなど簡単に出来はしないし、皆の目もあった。そもそも、そんなことをして一体何になると言うのだ。

しかし、そうでないのなら、これは一体どういうことなのだろう。ひょっとしてジンが削り出した物が本当に？

「いやいやいやっ！」

私は頭を振り、本体を元の位置に戻すと盆を持って立ち上がった。噂に曰く、枝を彫れば花が芽吹き、鳥を彫れば春を謳う、と。

舌も鼻も、この現実を認識し、忘れることが出来ないほどの衝撃を主張している。しかし、どうしても頭で理解することができなかった。

私は全てを胸に秘め、嚴重に鍵付きの箱へと収めると、蔵の扉を閉じた。

いずれ忘れると、胸の中で何度も念じながら。

だが、この心配は不毛であったと、後に知ることとなる。

十年の後、どうしても忘れられずに箱を開けた私が見た物は、変わらずに周囲を睨む鷹の頭と何も載っていない小皿、そして僅かに残された食べ糟ばかりであった。

(後書き)

『眠り猫』は彼の作ではありません。もしそうなら、すでに居ない筈ですからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3163h/>

左

2010年10月8日15時09分発行